

町田市共同研究成果報告

ALTとのチームティーチングの質を高め、 思考ツールを取り入れた授業改善をした結果、 生徒の主体性、協働力、「話すこと」の力が大きく向上

リンク・インタラックは、町田市教育委員会、町田市立金井中学校の栗橋ゆかり先生にご協力をいただき、元関西外国語大学教授で現在、リンク・インタラック、エグゼクティブ・コンサルタント、英語“わくわく”授業研究所を主宰する中嶋洋一先生監修のもと、「ALTとのチームティーチングをどのように質的に高めていけるのか」をテーマに、「主体的・対話的で深い学び」の視点から授業改善に向けた共同研究を行いました。

その結果、ALTとの理想的なチームティーチングを通して、生徒の主体性を高める指導、即興のやり取りにつながる指導、SDGsの内容を深める指導を実現し、生徒の主体性や協働力、「話すこと（やり取り・発表）」の力が大きく向上しました。本稿では、研究の概要とその成果をお伝えします。

「話すこと」に課題が多い中学生の英語

令和5年度の全国学力・学習状況調査では、4年ぶりに中学校で「英語」が出題されました。「話すこと」では2つの大問が出題されました。そのうち、大問2「説明を聞いて、自分の考えとその理由を話す」における正答率は4.2%、無回答率は18.8%と低調な結果となりました。

問題は、環境問題についての英語のプレゼンテーションを聞き、話し手の意見に対する自分の考えとその理由を話すものでしたが、プレゼンテーションの感想だけを話すにとどまってしまう生徒が多かったようです。

国立教育政策研究所は、解答を分析し、次のように述べています。「話し手の意見を踏まえた上で、自分の考えやその理由を聞き手に話して伝えることに課題があると考えられる。その背景には、自分の考えやその理由を整理できなかつたり、自分の考えとその理由を話すために必要な表現が身に付いていなかったりすることがあると思われる」。

また、授業で「主体的・対話的で深い学び」の視点から授業改善に取り組んでいる中学校ほど、「話すこと（やり取り・発表）」の言語活動にも取り組んでいる傾向が見られること、さらに、実際に言語活動に取り組んでいることを実感している中学生ほど「英語の授業の内容はよく分かる」「英語の勉強は好き」と回答しており、英語の平均正答率も高い傾向が見られると分析しています。

産学官で授業改善の共同研究

こうした背景から「話すこと」の力を伸ばすには、「主体的・対話的で深い学び」が実現できる授業を展開すること、その中で、生徒が自分の考えや気持ち、理由を明確にしながらかつ伝える言語活動を取り入れることが重要であると考えられます。

しかし、こうした改善に向けての具体的な指導方法の先行実践の事例はまだ少なく、未来を見据えた学びの推進には課題も多い現状があります。

そこで、中嶋洋一先生の監修で、2023年10月～2024年3月の半年間、町田市立金井中学校の中学3年生を対象に今回の共同研究を実施しました。

本研究の目指すところは、ALTとのチーム・ティーチングの質を高め、生徒の「困難な状況において課題を見出し、主体的に考え、他者と協議し、解決策を導き出す力」を育てることです。これは「令和の日本型学校教育」の目指す学びを実現することと重なります。

教師の「意識改革」が授業を変える第一歩

最初の授業を参観された中嶋先生は、「生徒たちは大きな声で発表ができる。積極性もあるが、残念ながら話されている内容が薄く、話題を広げることができていない」という実態から、そうなる理由を次のように分析しました。

- 単元や各時間で「何をゴールにするのか」を明確にできていなかったため、生徒が学びの見通しが持ちにくい。
 - ALTには直前に授業内容のみを伝えていたため、ALTもゴールを理解できないまま授業に臨んでいる。
- 中嶋先生は栗橋先生の生徒の見取りや、授業展開の悩み、さらには市内全体のALT活用の課題を丁寧に引き出していきました。対話を通して、栗橋先生は「教師が自分の授業に対して、もっとよくするにはどうすればいいかという意識を持ち続けることが大切。自ら学びに行かなければ」とハッとされたそうです。この栗橋先生の「自己理解」が授業改善の第一歩となりました。

思考ツールの正しい指導法を理解し、ALTと一緒に実践

中嶋先生は、授業に2つの思考ツール「マッピング」と「マンダラート」を組み合わせた新しい発想の「階層式マッピング」で、生徒が自分の考えを整理し、発話内容を豊かにする指導を提案されました。「マッピング」は、キーワードとなる言葉から、関連する情報をストーリーのようにつなげていきます。これにより、生徒は情報を論理的につなげられるようになります。「マンダラート」は9つマスを中心に書かれたテーマから、周りに関連することを連想していきます。これに慣れると、生徒は発想が豊かになっていきます。この2つを組み合わせることで、チーム(4人)が、中心テーマ(たとえばSDGs)から発想したことをつなぎ、簡単にスピーチやプレゼンテーションを組み立てることができます。

栗橋先生とALTが、「階層式マッピング」を使ってやり取りするモデルを示し、生徒も実践することで、イメージが膨らんだ生徒の発話の質や量がみるみる高まってきました。



栗橋先生とALTが「マンダラート」を使ってデモンストレーションを見せる様子

「階層式マッピング」は、ALTとのティームティーチングの質そのものを改善するためにも役立ちました。それを使ってALTとお互いの考えやゴールを共有することで、次の授業作りにもつながり、ALTが生き生きと授業に参画するようになりました。中嶋先生も「ALTと年度初めに育てたい生徒像と全体構想を共有しておくことで、授業の発想が広がり面白くなっていきます。そのためにも思考ツールは役に立ちます。」と話しています。

生徒が話したいテーマで学習意欲が向上

英語で話すテーマを生徒自身が選ぶことで、個々の学習意欲が高まりました。以前は教師がテーマを決めていましたが、これでは生徒の発話が単語の羅列にとどまり、深い対話が生まれませんでした。そこで、生徒に話したい

テーマをアンケートで尋ねたところ、教師の与えるテーマと生徒の希望にギャップがあることが分かりました。

生徒が話したいテーマを選ぶと、伝えたい内容が自分ごとになり、発話に対する意欲も増し、深みのあるやり取りが可能になっていきました。また、「自己評価(自己申告)シート」を導入し、生徒自身が「本時のねらい」から繋げて自分でゴールを設定するようにしました。これにより、生徒が授業のゴールを意識して学習に取り組むようになりました。栗橋先生も「それまでとまったく違う50分になった」とその効果を振り返っています。

生徒用のCan-Doリストを配ってゴールを共有

3学期の最初に「生徒用のCan-Doリスト」を配布し、年度末までのゴールの見通しを共有することにしました。これまでは教師用のCan-Doリストを作成していたものの、それは教師止まりでした。そのため、生徒はゴールと具体的なつながりを意識しないまま授業に臨んでいました。しかし、この「生徒用Can-Doリスト」を作成、共有したことで、常にゴールを意識した授業が展開されるようになり、生徒たちの達成感と自己肯定感が高まりました。

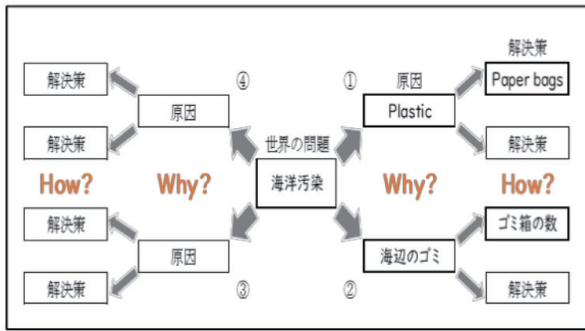
今回は、10月からの共同研究であったことから、効果を実感した栗橋先生は、「次年度は3月のうちに作成し、4月に生徒と共有しておきたい」と話しています。

	Level①	Level②	Level③
Listening	・スピーチ等の発表活動ではトピックを聴きながら発表者の気持ち、理由など、話の内容の詳細を聞きとることができる。【達成日: 1】	・スピーチ等の発表活動ではトピックを聴きながら発表者の気持ち、理由など、話の内容の詳細を聞きとることができる。【達成日: 1】	・スピーチ等の発表活動ではトピックを聴きながら発表者の気持ち、理由など、話の内容の詳細を聞きとることができる。【達成日: 1】
Speaking	・チャット活動では、会話の要がりを意識し、対話を続けることができる。【達成日: 1】	・チャット活動では、相手の話に反応しながら自分の伝えたいことを伝えることができる。【達成日: 1】	・チャット活動では、会話の要がりを意識し、対話を続けることができる。【達成日: 1】
Reading	・設定されたテーマについてのスピーチで、Mappingをもとに、自分の考えを述べたり、コメントしたりできる。【達成日: 1】	・設定されたテーマについてのスピーチで、Mappingをもとに、自分の考えを述べたり、コメントしたりできる。【達成日: 1】	・設定されたテーマについてのスピーチで、Mappingをもとに、自分の考えを述べたり、コメントしたりできる。【達成日: 1】
Writing	・長文の多読・速読を通して、概要把握を行うことができる。重要な点を自力で探し、情報を整理し、要約文を作ることができる。【達成日: 1】	・長文の多読・速読を通して、概要把握を行うことができる。重要な点を自力で探し、情報を整理し、要約文の穴埋めができる。【達成日: 1】	・長文の多読・速読を通して、概要把握を行う。重要な点を自力で探し、情報を整理し、要約文を作ることができる。【達成日: 1】
Reading	・チャット活動後の内容聞き取りや、英作文の作成時では、既習の文法知識や語彙を生かし、英作文をつくらることができる。【達成日: 1】	・チャット活動後の内容聞き取りや、英作文の作成時では、既習の文法知識や語彙を生かし、英作文をつくらることができる。【達成日: 1】	・チャット活動後の内容聞き取りや、英作文の作成時では、既習の文法知識や語彙を生かし、英作文をつくらることができる。【達成日: 1】

生徒用Can-Doリスト

「階層式マッピング」によって生徒のプレゼン力が変わる

発表に向けたグループ活動で「階層式マッピング」を取り入れた時、驚くべき効果が表れました。これまでのグループ・プレゼンの活動では、英語が得意な生徒がたくさん話したり、苦手な生徒が1~2文程度を暗記して発表したりすることがありました。しかし、「階層式マッピング」を使うことで、チームのメンバー全員がイメージを共有し、それぞれの担当を責任を持って作り上げることができました。今回は、「住みよい世界にするためにはどうしたらよいか」といった課題に対し、原因や解決策を分担し、一人一人が責任を持って考え、それをチームで1つのストーリーにまとめました。プレゼンに必要な写真を入れたスライドも自分たちで作成し、それをリモコンで操作しながら発表をしました。さらには、各チームのプレゼン後に英語で即興の質疑応答も行われました。全員が参画する授業(「主体的・対話的で深い学び」)が実現したのです。



「階層式マッピング」のイメージ

ALTとの関わりで協働的な学びを深める

グループ発表会に向けて、栗橋先生とALTが生徒にゴールを明確に伝えたことで、生徒は主体的に取り組むようになりました。授業の回数が限られていたALTは、ビデオ・メッセージで、階層式マッピングを活用したテーマの深掘りの仕方や、より良いプレゼンにするアドバイスをしました。中間指導やALTからのフィードバックを元に、生徒たちは協力して準備を進めました。受験の準備で忙しいにもかかわらず、多くの生徒たちには積極的に連絡を取り合い、発表内容を仕上げようとする姿勢が見られました。

やがて、相互評価で良かったところを伝えるだけでなく、改善点もしっかりと伝え合うようになり、お互いに「ありがとう」という感謝の言葉が行きかう、温もりのある授業になっていきました。「対話的で深い学び」をベースとして行われた授業を通して、生徒は「さらに仲良くなれた」と言い、栗橋先生は「人を育てることができた」と振り返っています。

3年生最後の授業で、生徒たちは「住みよい世界にす

るために自分たちにできること」について、自分達で考えたテーマでプラスチックごみの削減、ジェンダー問題、動物保護などの問題について、スライドや実物を見せながら、いきいきと発表しました。質疑応答も活発に行われ、中嶋先生は「まさに、文部科学省が目指している、質の高い授業だった」と高く評価しました。



グループ発表会の様子

生徒の声「順序立てて話せるようになった」

事後のアンケートから、9割の生徒たちが「以前は、英文を組み立てるのが難しかったが、マッピングを使うことで、話が途切れず盛り上がった」、「次に話すことが思い浮かび、順序立てて話せるようになった」のように、即興のやり取りができるようになった、まとまったことを話すことに自信がついたと述べています。

また、多くの生徒たちから、思考ツールはプレゼンでテーマを深掘りする際にも役立てたい、さらには高校での「総合的な学習の時間」やディベート、「探究の学習」など英語以外の教科や活動にも役立ちそう、といった嬉々とした声が聞かれました。この主体的に学習に取り組もうとする姿勢は、「わかる授業」ではなく、今回のように「できた!を実感する授業」「仲間と協働する授業」によって育まれたのではないかと考えられます。

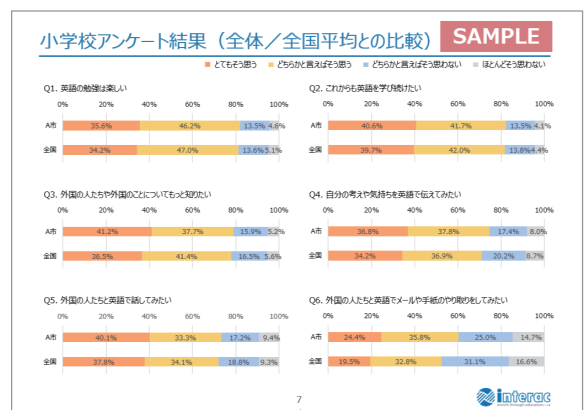
授業改善に活用できる！ 英語学習状況調査

リンク・インタラックでは、児童生徒の英語学習意欲と英語力の向上を目指し、「児童生徒英語学習状況調査」を毎年実施しています。児童生徒の「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「主体的に学習に取り組む態度」を測定し、英語教育事業の効果を検証して授業の改善などに役立てることが目的です。本調査では、小学6年生と中学3年生を対象にアンケート(5分程度)と小テスト(20分)を実施します。ご希望により小学5年生及び中学1、2年生へのアンケート追加実施も可能です。

2023年度調査は10月から12月にかけて、ALTを配置する小・中学校に通う全国の児童生徒約17,000名を対象に実施しました。この調査を学校現場からのALT満足度調査と連携して分析した結果、「ALTの授業への楽しみ度合いが高い場合は児童生徒の英語学習意欲が高く、英語学習意欲が高いほど英語力が高い」という明確な傾向が見られました。

本調査は、例えば今回共同研究を実施した町田市のような自治体における、授業改善の効果確認や、それ以外にも、自治体での教育施策の効果検証、ALT事業の評価、学習状況の把握、課題の特定、学校内での授業改善に役立てることが可能です。調査結果は、当該

自治体の各小・中学校の個別結果や経年比較、全国平均との比較を含む詳細な報告書にまとめ、英語教育の方向性を定めるツールとして活用されています。



英語学習状況調査報告書のサンプル

2024年度も10月から12月に「児童生徒英語学習状況調査」を実施する計画です。本調査にご関心のある、もしくは調査を希望する自治体様や学校様は各支店営業担当までお問い合わせください。

子どもたちのドリームサポートプロジェクト 英語スピーチコンテスト 「手話通訳士になりたい！」子どもの夢を叶えるサポート企画を実施

コンテストを通じて 英語学習の意欲を高めるきっかけに

子どもたちのドリームサポートプロジェクトは、リンク・インタラクが創業50周年を記念して2022年度に始めた、小学校4年生から6年生対象の英語スピーチコンテストです。児童は「私の夢」をテーマに、2、3分程度のスピーチ動画を提出します。スピーチは2回の審査を経て、最終的に各部門の5名の児童が最終審査に進みます。

このコンテストでは、参加者全員に、それぞれのスピーチに対するALTからの個別メッセージ入りの賞状が授与されます。コンテストの勝敗以上に子どもたちが自分の夢について考え、それを自分の言葉で英語で表現しようとする過程が大切だと考えるからです。変化の激しい現代社会に生きる子どもたちが「夢」を描き、それに向かって努力し続けるには、学びの楽しさを継続的な学習へとつなぐ工夫が重要です。弊社は、多くの児童がこの機会を通じて、英語の学習意欲や発信力を高め、主体的に人生を切り拓いていく力に繋げてほしいと考えています。

実際に参加した児童からは「英語で自分の気持ちを話せたから気持ちよかった。参加してみて自分が将来したい事が自分の中でもはっきりしてよかった」という声や、「英語の文章を作ったり、発音の練習をしたり、何回も動画の撮り直しをしたりして大変だったけれど、すごく頑張ってやりきったので、とても良い経験になった」といった感想が寄せられています。

最優秀賞受賞者には「夢を叶えるサポート」企画

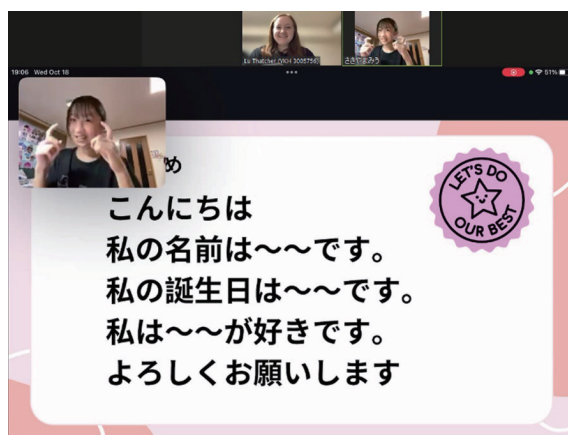
最優秀賞受賞者には「夢を叶えるサポート」が贈られます。「私の夢」に合わせて、その夢を叶えるための企画を、弊社と一緒に考え、支援します。第1回大会の一般部門・最優秀賞に輝いた先山美風（みう）さんのための「夢を叶えるサポート」企画を紹介します。

美風さんは、耳の間こえない友人との交流から「手話通訳士」になりたいという夢を持っており、その夢を叶えるための第一歩として、ALTによる手話通訳のオンラインレッスンを5週間にわたって週1回、計5回受講しました。手話講師を担当したルー・サッチャーさんはALTとして日本の学校に勤務しながら、日本手話とアメリカ手話を学び、現在も特別支援校のALTとして勤務しています。

手話レッスンは、ルーさんが美風さんのために内容をすべて考え、実施されました。「レッスンは、挨拶と指文字から始めました。私は美風に限られたレッスンを最大限に活用してほしかったので、指文字から始めるのが良いと思いました。最初に指文字を覚えれば、手話で基本的なコミュニケーションが取れるようになるからです」とルーさんは言います。

その後は指文字を使いながら、自己紹介を中心に進めました。私の名前は～、誕生日は～、私は～が好きです、私は～が嫌いです、などのトピックを扱いました。最後のレッスンでは、手話でお互いに質問し合うことに重点を置きました。そうすることで、自分が言いたい、聞きたいことを手話で即興的にやり取りすることができました。

美風さんは「手話のレッスンは毎回とても楽しかった」と夢に一步近づく経験ができた嬉しそうに言います。ALTのルーさんも「美風は意欲が旺盛で、レッスンをするのは本当に楽しかったです。最後には手話で上手に質問ができるようになりました。私にとって忘れられない思い出です」と話しています。



先山美風さんとルーさんの手話オンラインレッスンの様子

2024年度も開催します！

今年度も子どもたちのドリームサポートプロジェクト英語スピーチコンテストの申込が始まりました。今回も、参加者全員に賞状、そして最優秀賞受賞者には「夢を叶えるサポート」が贈られます。すべての参加者にとって有意義な経験となるよう、全力でサポートしてまいります。

英語スピーチコンテストへの
参加お申し込みはこちらから



<https://www.interac.co.jp/contest/>

好評につき第三回開催

interac
connect through education

子どもたちのドリームサポートプロジェクト /
小学生対象のオンライン形式

第三回
英語スピーチコンテスト